

## 大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(3)<sup>1</sup>

### 一般的授業選択態度と特定授業選択態度との比較

牧野 幸志

## Relation between types of student general attitudes on selecting classes and academic grades (3).

### A comparison of general attitudes on selecting classes to the attitudes on selecting a specific class.

Koshi Makino

#### Abstract

The present study was designed to investigate to compare students' general attitudes on selecting classes to the attitudes on selecting a specific class, and the relationship between those attitudes and examination scores. Two hundred and sixteen students took part in this survey by completing a questionnaire. The main results were as follows: (1) Three factors were found about student's attitudes on selecting a specific class. Those were the same as factors in Makino & Williams (in printing). (2) The attitudes on selecting a specific class were weaker than general attitudes on selecting classes in any of the three factors. (3) Students who attach more importance to "utility of class contents" tended to receive higher examination scores than those who attach less importance. Finally, directions for further research in this area were discussed.

Key words : general attitudes on selecting classes 一般的授業選択態度, attitudes on selecting a specific class 特定授業選択態度, university students 大学生, academic grades 成績.

#### 問 題

近年、大学では、学生による授業評価が行なわれている一方で、学生の自己評価も行なわれるようになってきている（牧野，2002a，2002b；松田・三宅・谷村・小嶋，1999；三宅，1999など）。授業評価は、学生の理解度を知るため、学生の要望を聞くため、授業改善のため、教員の自己点検のためなどの目的で行なわれている。学生の自己評価は、授業を評価する側の学生が、その授業に対する自分の態度を評価する目的で行なわれている。

<sup>1</sup> 本研究は、平成13年度私立大学等経常費補助金「教育・学習方法等改善支援経費」の援助のもとに行われたものである。

このような自己評価が行なわれる背景には、「授業態度の悪い学生に酷評されることに納得がいかない」、「不真面目な学生に正確な授業評価ができるのか」などの学生による授業評価への懸念がある。実際に、現代の大学生の学習態度は多様化しており、比較的まじめな学生がいる一方で、欠席、遅刻、授業中の私語、居眠り、携帯電話の使用などさまざまな問題が発生している（水野，1998，1999）。

このような問題が発生する原因の1つに、大学への進学理由があげられる。現在では大学への進学率が高まるとともに少子化が進んでおり、大学への進学は比較的容易になっている。一部の有名私立大学、国立大学を除けば、比較的容易に進学することができるようになった。このような状況においては、進学の理由も変化しつつある。本来の目的である勉学のために進学してくる学生もいるが、「なんとなく」、「親が行けというから」、「学校の先生から薦められて」など消極的な理由で進学を決める学生も多く存在する（刈谷，1995）。このような理由で進学してきた学生は、もともと学習意欲が低いいため、授業に集中できないことが多い。さらに、最近では、大学生の学力低下などのより深刻な問題も報告されている（井上，1993；豊田，1999）。

このように、現在の大学生は、さまざまな理由で進学してくるため、大学の授業に対して求めていることも多様化している。実際、大学生が授業選択の際に何を基準にするのか、どのような授業の情報を重視するのかという授業選択態度にもさまざまなタイプがあることが指摘されている（松田他，1999；三宅，1999）。例えば、授業内容を重視して選択科目を選ぶ学生もいれば、単位がとりやすい科目だけを選ぶ学生もいる。このような授業選択態度を知ることは、大学生がどのようなことを大学の授業に求めているかを知る手がかりとなる。また、授業選択態度と成績との関連の検討を行い、もし、ある授業選択態度をもつ学生の成績が悪いことが明らかになれば、その選択態度に応じた学生への対応、授業の構成が可能となるだろう。

近年、大学生がふだん授業を選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという一般的授業選択態度と成績との関連を検討した研究が行なわれている（牧野，2001d；牧野・Williams，印刷中；三宅，1999）。それらの中には、授業選択態度により成績が異なるという研究（三宅，1999）と授業選択態度は成績にはほとんど影響を与えないという研究（牧野，2001d；牧野・Williams，印刷中）がみられる。

三宅（1999）は、国立大学の学生を対象にし、授業選択態度の実態をクラスター分析によりタイプ分けを行なっている。その結果、大学生の授業選択態度に5つのタイプを見い

だしている。それらは、「積極的な授業の選択基準を持たないタイプ」、「多人数でなく、主体的な学習ができる授業を期待するタイプ」、「教官の人柄や授業内容を重視するタイプ」、「どの授業も選択しようとする積極的なタイプ」、そして、「単位の取りやすさだけを重視するタイプ」であった。三宅（1999）がこれらのタイプにより成績が異なるかを検討したところ、積極的な授業の選択基準を持たないタイプと単位の取りやすさだけを重視するタイプにおいては、優を取得する学生の数が他の成績（良，可，不可）を取得する学生よりも少なかった。また、教官の人柄や授業内容を重視するタイプでは、優を取得する学生数が他の成績（良，可，不可）を取得する学生よりも多かった。しかしながら、三宅（1999）においては、対象となった授業が必修科目であり、選択の余地がなかったこと、調査対象となるクラスが複数存在し、異なる教官が異なる評価基準で成績をつけているという問題点が指摘された（牧野，2001d）。

牧野（2001d）、牧野・Williams（印刷中）では、三宅（1999）の問題点を改善し、普段、大学生が授業を選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという一般的授業選択態度の構造を明らかにし、授業選択態度と成績との間にどのような関係があるかを検討した。牧野（2001d）、牧野・Williams（印刷中）では、一般的授業選択態度に「単位のとりやすさ」因子（牧野・Williams（印刷中）では「楽勝授業」因子）、「授業内容の良さ」因子、「授業内容の有用性」因子の3つの因子を見いだした。この結果は、大学生が授業の内容、有用性を重視して授業を選ぼうとしていること、なおかつ、できればらかな授業を望んでいることをあらわしている。

牧野（2001d）はこの3つの因子の得点をもとに大学生の一般的授業態度を分類し、3つのタイプを見いだしている。それらは、三宅（1999）のタイプと類似しており、「単位の取りやすさ重視」タイプ、「授業内容の良さ・有用性重視」タイプ、「消極的授業選択」タイプであった。そして、これらの一般的授業選択態度のタイプと成績との関係を検討した結果、試験得点と成績評価に関して、授業選択態度のタイプによる差はみられなかった（牧野，2001d）。また、牧野・Williams（印刷中）では、各因子得点の上位群と下位群との間で、成績得点に差がみられるかを検討した。その結果、「楽勝授業」、「授業内容の良さ」の2因子については差がみられなかった。他方、「授業内容の有用性」については、授業選択の際に、授業内容が役立つかどうかを重要視する学生はそうでない学生よりも成績が良いことが明らかとなった。この理由として、授業内容の有用性を重要と考える学生は、授業内容に対してもともと関心があり、この関心が授業への出席や授業中

の学習態度に肯定的な影響を与えたために、成績得点が高くなったと推測している（牧野・Williams，印刷中）。

このように、一般的な授業選択態度と成績との関連は一貫していないものの、その影響は小さいと考えられる。しかしながら、一般的授業選択態度とは、「学生が、普段、授業を選択する際にどのようなことを重要と考えているか」という一般的な態度であり、特定の授業を想定した選択基準ではない。被調査者となった学生は対象となった授業を受ける際の選択基準を回答しているわけではない。したがって、実際に対象となった授業を受ける際にどのようなことを重要と考えたかという態度と成績との関連をみってみる必要がある。

本研究の第1の目的は、三宅（1999）や牧野（2001d）における一般的授業選択態度と実際に受講を考えた際の授業選択の態度である特定授業選択態度との構造を比較することである。実際の授業を選ぶときにも、その態度の構造は変わらないが、それらの重要度は異なると予想される。本研究の第2の目的は、特定授業選択態度と成績との関連を検討することである。授業中の学習態度が最も成績に影響を与えることが明らかになっている（牧野，2001c）ことから、授業選択態度の成績への直接の影響は小さく、特定授業選択態度による違いはほとんどみられないと予想される。

## 方 法

### 対象授業と被調査者

対象とした授業は、教養の選択科目であり、すべての学部から学生が集まっていた。授業内容は心理学の概論であった。授業形態、授業方法については、あらかじめ後期の授業開始前にシラバスの配布により、知らされていた。担当教官は、調査実施時点では教職歴1年6ヶ月の男性であった。

被調査者は四国地方の国立大学の教養クラスを受講生216名（男性104名、女性112名、平均年齢18.67歳、年齢幅18～24歳）であった。ただし、216名の被調査者のうち、最終的な試験を受けた人数は193名（男性94名、女性99名）であった。したがって、分析によって対象者の人数が異なる。

### 質問紙の構成と成績

一般的授業選択態度項目 牧野・Williams（印刷中）で測定されたデータを利用した。項目は牧野（2001d）を、因子分析の結果の詳細は牧野・Williams（印刷中）を参照して

いただきたい。使用された質問項目は、大学生が授業を選択する際に、どのようなことを重要視するかを調べるものであった（全21項目）。これらの項目に対して、「あなたが、大学で、一般的に、授業を選択する際に重要となることについてお伺いします。あなたは、授業科目を選択するときに、以下のことをどの程度重要と考えますか？」という質問を行なった。それらの質問に対する「授業の内容が日常の問題と関連している」などの回答項目に対して、「まったく重要でない」～「非常に重要である」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど授業選択の際に、それらのことを重要視することを示す。

**特定授業選択態度項目** 教示と質問の方法だけが牧野・Williams（印刷中）と異なり、その他は、牧野（2001d）、牧野・Williams（印刷中）と全く同様である。回答項目は、大学生が授業を選択する際に、どのようなことを重要視するかを調べる項目21項目であった。これらの項目を「あなたがこの授業科目を選択するときに、以下のことをどの程度重要と考えますか？」という質問の後に配列した。各項目に対して、「まったく重要でない」～「非常に重要である」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど、これから受講しようとしている授業の選択の際に、それらのことを重要視することをあらわす。

**成績** 学生の成績は、レポート（30点満点）と講義の最終回に行なわれた試験（70点満点）の合計点を利用した。試験は記述式であった。成績評価（優、良、可、不可）は、合計得点の結果のみで行なわれた。60点未満を不合格、60点以上を合格（60～69点を可、70点～79点を良、80点以上を優）とした。

## 手続き

調査は、平成13年10月2日の初回オリエンテーションにおいて行なわれた。まず、「授業選択に関するアンケート」という形で一般的授業選択態度が測定された。その際に、「一般的に授業を選択するときに」という教示が強調された。その調査が終了した後に、調査用紙を回収した。次に、「特定授業の選択に関するアンケート」として、特定授業選択態度が測定された。その際には、「この授業を選択するときに」という教示が強調された。所要時間は、各調査が約15分ずつであった。

## 結果

### 対象授業の形態と難易度

**対象授業の形態** 対象となった授業の形態の詳細は牧野・Williams（印刷中）を参照し

ていただきたい。授業は主に1, 2年生を対象とした教養の選択科目であった。授業科目は心理学の概論で、授業は主に教科書を用いて行なわれた。開講曜日、時刻は毎週火曜日2校時(10:30~12:00)であった。クラスサイズは、毎回180名程度であり、出席はとられていなかった。

難易度 対象となった授業の試験受験者数、合格者数などの詳細は牧野・Williams(印刷中)を参照していただきたい。成績評価は、最終回に記述式で行なわれた試験(70点満点)とレポート課題(30点満点)の合計得点で行なわれた。合計得点が60点以上を合格(単位認定)、60点未満を不合格(単位不認定)とした。受講登録者(被調査者数)に占める合格者の割合は63.4%であり、試験受験者数に占める合格者の割合は79.8%であった。これらの割合は、調査を行なった大学の他の教養科目の合格率と似かよっており、対象となった授業の合格への難易度が平均的なものであったことを示している。

#### 特定授業選択態度の構造

特定授業選択態度に関する21項目の評定値に対して因子分析を行った。固有値1を基準とする因子分析(主成分法、バリマックス回転)を行い、2因子以上に負荷の高い項目、共通性が.400未満の項目を削除した。その結果、3因子構造と解釈された。因子構造は、一般的な授業選択態度の構造をみた牧野・Williams(印刷中)とほぼ同様であった。第1因子は「楽勝授業」因子であり、“出席をとらない。”、“居眠りをする”など授業出席への負担が少ないこと、授業がらくであることに関する項目に負荷が高かった。「楽勝授業」因子に含まれる7項目( $r = .737$ )の平均を「楽勝授業」得点として算出した(1~5点、得点が高いほど、授業がらくであることが授業選択の基準となることを示す)。第2因子は「授業内容の良さ」因子であり、“授業の内容がわかりやすい。”、“授業の内容が興味深い(おもしろい)”など8項目に負荷が高かった。第2因子に含まれる8項目( $r = .814$ )の平均を「授業内容の良さ」得点として算出した(1~5点、得点が高いほど、授業内容の良さが授業選択の基準となる)。第3因子は「授業内容の有用性」因子であり、“授業の内容が将来役に立つ。”、“授業の内容が日常の問題と関連している。”など授業内容が実際にどのように役立つのかその有用性に関する項目に負荷が高かった。これら4項目( $r = .649$ )の平均値を「授業内容の有用性」得点として算出した(1~5点、得点が高いほど、授業内容が役立つことが授業選択の基準となる)。いずれの因子の信頼性も高い値であった。

## 一般的授業選択態度と特定授業選択態度との比較

受講生が一般的に授業を選択する際の態度と特定の授業を選択する際の態度との間に違いがあるかを検討した。一般的授業選択態度と特定授業選択態度の因子構造はほぼ同様であった。因子に含まれる項目もほぼ同様であったので、その因子構造は牧野・Williams（印刷中）を参考にした。選択状況により、授業選択態度に違いがみられるかを検討した。また、男性に比べ女性の方が成績得点が高いこと（牧野・Williams，印刷中）を考慮して、性別の要因とともに因子得点が一般的に選択する場合と特定の授業を選択する場合と異なるかを検討した。分析は、性別（男性・女性）×選択態度（一般的・特定）の2要因分散分析（1between 1within）で行なった。従属変数は、楽勝授業因子、授業内容の良さ因子、授業内容の有用性因子であった。

楽勝授業因子 楽勝授業因子得点に対して、2要因分散分析を行なった。その結果、選択態度の主効果が有意であった（ $F=29.07$ ， $df=1$ ， $p<.01$ ）。楽勝授業の重要性評価は、一般的授業選択の場合（ $M=2.66$ ）よりも、特定授業選択の場合（ $M=2.48$ ）の方が低かった（Table 1 参照）。

授業内容の良さ 授業内容の良さ因子得点に対して、2要因分散分析を行なった。その結果、選択態度の主効果が有意であった（ $F=44.57$ ， $df=1$ ， $p<.01$ ）。授業内容の良さの重要性評価は、一般的授業選択の場合（ $M=4.15$ ）よりも、特定授業選択の場合（ $M=3.92$ ）の方が低かった（Table 2 参照）。

授業内容の有用性 授業内容の有用性因子得点に対して、2要因分散分析を行なった。その結果、選択態度の主効果が有意であった（ $F=39.64$ ， $df=1$ ， $p<.01$ ）。授業内容の有用性の重要性評価は、一般的授業選択の場合（ $M=3.57$ ）よりも、特定授業選択の場合

Table 1 性別と選択状況による楽勝授業因子の差異

性別	選択状況	一般的授業選択 <sup>1)</sup>	特定授業選択 <sup>2)</sup>
男性 ( $n=113$ )		2.69	2.56
女性 ( $n=115$ )		2.63	2.40

注1) 普段、選択科目を選ぶときの態度

注2) 対象となった授業科目を選ぶときの態度

評定値は、1～5点の得点を取りうる。

表中心部の不等号は、その方向の主効果が有意であることを示す（\*\* $p<.01$ ）

( $M = 3.28$ )の方が低かった (Table 3 参照)。

#### 特定授業選択態度と成績との関係

特定授業選択態度により成績が異なるかを検討した。各因子別に、特定授業選択態度により成績得点が異なるか t 検定を行った。まず、被調査者を特定授業選択態度の各因子得点の高低により分類した。各因子上位30%を高群、下位30%を低群とし、成績得点に対して t 検定を行った (Table 4)。その結果、楽勝授業因子と授業内容の良さ因子に関しては、高低群間で成績得点に差はみられなかった (それぞれ、 $t(124) = 1.12, n.s.$ 、 $t(118) = 1.16, n.s.$ )。他方、授業内容の有用性因子においては、高群の学生 ( $M = 74.42$ ) は低群の学生 ( $M = 68.07$ ) に比べ成績得点が高い傾向がみられた ( $t(131) = 1.72, p < .10$ )。つまり、対象となった授業を選択する際に、授業内容がどれだけ役立つかなどを重要視している学生は、比較的重要視していない学生よりも成績得点が高い傾向がみられた。

Table 2 性別と選択状況による授業内容の良さ因子の差異

性別	選択状況	一般的授業選択 <sup>1)</sup>	特定授業選択 <sup>2)</sup>
男性 ( $n = 114$ )		4.15	3.98
女性 ( $n = 117$ )		4.15	3.86

注1) 普段、選択科目を選ぶときの態度

注2) 対象となった授業科目を選ぶときの態度

評定値は、1～5点の得点を取りうる。

表中心部の不等号は、その方向の主効果が有意であることを示す (\*\*  $p < .01$ )

Table 3 性別と選択状況による授業内容の有用性因子の差異

性別	選択状況	一般的授業選択 <sup>1)</sup>	特定授業選択 <sup>2)</sup>
男性 ( $n = 114$ )		3.53	3.23
女性 ( $n = 113$ )		3.60	3.33

注1) 普段、選択科目を選ぶときの態度

注2) 対象となった授業科目を選ぶときの態度

評定値は、1～5点の得点を取りうる。

表中心部の不等号は、その方向の主効果が有意であることを示す (\*\*  $p < .01$ )



Table 4 特定授業選択態度による成績の差異

	楽勝授業		授業内容の良さ		授業内容の有用性	
	低群 <i>M</i> = 1.78 <i>n</i> = 64	高群 <i>M</i> = 3.19 <i>n</i> = 62	低群 <i>M</i> = 3.23 <i>n</i> = 65	高群 <i>M</i> = 4.59 <i>n</i> = 55	低群 <i>M</i> = 2.52 <i>n</i> = 68	高群 <i>M</i> = 4.09 <i>n</i> = 65
成績得点 (標準偏差)	72.34 (20.66)	68.00 (22.89)	67.65 (21.72)	72.24 (21.56)	68.07 (22.18)	< <sup>+</sup> 74.42 (20.27)

注) 不等号は、2つの評定値間のその方向に有意傾向があることを示す (t検定, \* $p < .10$ )

### 考 察

本研究の目的は、大学生が特定の選択科目を実際に選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという特定授業選択態度の構造を把握し、その選択態度と成績との関連を検討することであった。大学生が特定の授業を選択する際にどのようなことを重要と考えているかを検討した結果、一般的に授業を選ぶ際とほぼ同様の3因子が抽出された。1つ目の因子は、授業への参加がらくであること、勉強しなくてよいことを重要視するという「楽勝授業」因子であった。この因子は、牧野(2001d)と三宅(1999)における「単位のとりやすさ」と同様の内容を示していると思われる。これは、大学生がいかにらくをしたいか、勉強したくないかを反映している。第2因子は、「授業の内容がわかりやすい。」、「授業の内容が興味深い(おもしろい)。」など授業内容の良さを重要と考える態度であった。この「授業内容の良さ」も、牧野(2001d)と三宅(1999)における「授業内容の良さ」と同様であった。ただし、本研究では、「単位がとりやすい」、「試験が簡単である」などの項目も「授業内容の良さ」に含まれていた。これは、良い授業の中身として単位のとりやすさや試験の容易さが入っていることを示唆している。第3因子は、授業の内容が将来役に立つことを重要と考える「授業内容の有用性」であった。これら「授業内容の有用性」の項目は、牧野(2001d)の「授業内容の有用性」と同じであり、三宅(1999)においては「授業内容の良さ」の因子中に含まれていた。このことから、大学生が将来役立つことを学びたいという要望がうかがえる。本研究で抽出された3因子は牧野(2001d)、牧野・Williams(印刷中)の一般的授業選択態度とほぼ同様のものであった。このことより、学生が特定の授業を選択する場合の態度の構造は、普段、一般的に授業を選択する態度の構造とあまり変わらないことがわかる。

受講生の一般的授業選択態度と特定授業選択態度との間に差がみられるかを性差とともに

に検討した。その結果、楽勝授業因子、授業内容の良さ因子、授業内容の有用性因子のいずれの因子得点も、一般的授業選択の場合よりも、特定授業選択の場合の方が低かった。つまり、受講生は一般的に授業を選ぶ場合よりも実際に授業選択する際に、楽勝授業であることを重要視していないし、授業内容が良いことや授業内容が有用であることも重要視していないことが明らかになった。これは、一般的には、授業内容に高い期待をしており、なおかつ、授業がらくであることを望んでいるが、実際に選ぶ段階になったときにはその重要性の度合いが下がっていることを示している。実際に具体的な授業を選ぶ際には、授業内容などにあまり期待していないのかもしれない。

次に、学生の特定授業選択態度により成績が異なるかを検討した。その結果、楽勝授業因子と授業内容の良さ因子に関しては、上位群と下位群との間で成績得点に差はみられなかった。つまり、対象となった授業においてらくをして単位を取ろうと考えている学生とそうでない学生との間で成績に差は見られなかった。また、授業内容の良さを重要視して授業を選択する学生とそうでない学生との間においても成績に差はみられなかった。これらは予想した結果であった。他方、授業内容の有用性を重視する学生は、そうでない学生に比べ成績得点が高い傾向がみられた。つまり、対象となった授業を選択する際に、授業内容がどれだけ役立つかなどを重要視していた学生は、比較的重要視していない学生よりも成績が良い傾向がみられた。これらの結果は、一般的授業選択態度と成績との関連を調べた牧野・Williams（印刷中）とほぼ同様であった。これは、授業がどれだけ役立つかを重要視することにより、授業への関心、授業参加への動機づけ、さらに学習意欲が高まったためと推測される。

最後に、本研究の今後の課題として、以下の点があげられる。まず、特定授業選択態度と授業中の学習態度との関連性を検討する必要がある。本研究では、対象となった授業の内容の有用性を重視する態度と成績の間に関連がみられた。しかしながら、その態度と成績との因果関係を示唆するような結果はみられなかった。授業を選ぶ際の基準において、どれだけ役立つかということを重視する態度は、その授業への参加の動機づけ、授業中の学習態度、試験前の学習態度にも影響を与え、その結果、成績が上昇するのかもしれない。次に、授業選択態度と授業評価の関連を調べる必要があるだろう。授業を選ぶ際にどのようなことを重要視したかにより、授業評価も変わってくると考えられる。授業内容を重要と考えた学生は授業内容をみて評価を行なうであろうし、単位のとりやすさを優先した学生は評価基準が甘いことを高く評価するであろう。学生が授業に求めている要望により、

授業評価がどのように異なるかを分析していくことが求められる。

#### 引用文献

- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8) 福岡教育大学紀要, 42, 277 - 291.
- 刈谷剛彦 1995 キャンパスは変わる 玉川大学出版部
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 教養選択科目「社会心理学」の場合 高松大学紀要, 35, 1 - 16.
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目「人間関係論」の場合 高松大学紀要, 35, 17 - 31.
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1) 多変量解析を用いた因果モデルの検討 高松大学紀要, 36, 55 - 65.
- 牧野幸志 2001d 大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(1) 一般的授業選択態度のタイプ分け 高松大学紀要, 36, 67 - 77.
- 牧野幸志・Williams, R. 2002 大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(2) 一般的授業選択態度における性差 高松大学紀要, 39, 印刷中.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 121 - 130.
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 141 - 148.
- 水野邦夫 1998 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について 日本心理学会第62回発表論文集 375.
- 水野邦夫 1999 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について(2) 日本心理学会第63回発表論文集 1025.
- 豊田秀樹 1999 学力崩壊 PHP研究所

高松大学紀要

第 39 号

平成15年 2月25日 印刷

平成15年 2月28日 発行

編集発行

高 松 大 学  
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064